

森づくり活動 誌上視察

～より良いパートナーシップを結んでいくために～

里山保全ワーキングホリデー

朝廣 和夫（九州芸術工科大学 芸術工学部 環境設計学科 助手）

はじめに

黒々としたスギ林の迫る村道を抜けると、棚田と集落の景観が開けてくる。福岡県八女郡黒木町の山間山麓地域は、八女茶の産地として有名であり、女優 黒木瞳の生まれ育った地としても知られている。ここには、優美な曲線を描く棚田や段々畑がある。水も豊富で、水田に勢い良く流れていく様子は、生命の喜びを感じる。茶園の側には、竹林、クヌギ林、そしてスギ林が広がり、シイタケやタケノコの収穫も盛んである。まさに、ここ黒木町は、「里山」と呼ぶにふさわしい。しかし一方で、人口の減少が目につき始めている。高齢化による労働力不足で、農林地の管理が行き届かず、景観全体が徐々に変容しつつある。本稿ではパートナーシップを切り口に、この問題に取り組み、里山保全ワーキングホリデー」を紹介する。

英国から来た「ワーキングホリデー」

「ワーキングホリデー」。直訳すると「活動休暇」とでも訳することになるのか、英和辞典をひいてもこの熟語は見つからない。通常、日本で知られているのは、青年の充実した海外体験を目的に、休暇と共に有給の就労を認める交流制度であ

る。一方、「ワーキングホリデー」という場合、これは別の意味を持つ英国の言葉である。この国では、農業の近代化により伝統的な田園景観が失われつつあった。この改善を目的とした市民ボランティアの無償保全活動を、「ワーキングホリデー」と称するのである。最大の活動団体である、BTCV（英国環境保全ボランティア・トラスト）（一）は、保全活動休暇(Conservation Working Holiday)を行っている。これは、一週間の保全寄宿を通して、雑木林や牧野の石垣の管理、ボランティア相互の交流を行うものである。英国国内で年間六回の合宿を行っており、近年では各国とパートナーシップを結び、一六ヶ国、六五以上の「国際ワーキングホリデー」を行っている。

九州芸術工科大学の重松敏則教授は、日本における環境保全活動の展開を目指して、一九九四年からBTCVと協同で「国際ワーキングホリデー」の取り組みを開始した（二）。数十年は進んでいる英国の保全活動の技術、行政や民間と連携した運営システム、そして交流の効果を学ぶことは、日本の閉塞的な地域環境問題を打開するのに役立つと期待されたからである。



里山ワークのボランティア

中山間地での挑戦

日本における農村景観の変容は、英国と同じく近代化の影響を受けて貧化してきた。傾斜地の多い中山間地の黒木町は、平地に比べ厳しい農林業経営を余儀なくされ、景観の保全が難しい。これらの改善を目指し、若手農林家の取り組みがはじまった。

農業を営む権原寿之氏は、おいしく安全な野菜を消費者に届けるために、一九八四年から産直と有機農業をはじめた。傾斜地での農業は、畔や石垣の草刈り、狭隘な農地での作業など、平地に比べると労働効率が極めて悪い。しかし、先祖が切

り開いた地域環境を守るには、この価値を、消費者と共有する必要があると考えた。

一方、林業の取り組みである。この地域には一九五〇年代からスギ・ヒノキが広く植林されている。近年では、安価な外材の輸入拡大により、国産材のシェアが減ったため、林業経営が難しくなった。それに追い打ちをかけるように、一九九一年九月、九州北部を襲った台風は、この地域のスギ・ヒノキ林に甚大な被害を及ぼした。当時一名の会員を有していた、「黒木町林業振興会青年部」（以降、林研という）は、その後、六名へと会員数を減らしたのである。会員である宮園福夫氏は、被災跡地の一部に、新しい試みとして、ヤマザクラ、ケヤキなどの広葉樹を植林した。スギ・ヒノキを再植林しても、台風で被災する可能性が高いからである。また、笠原川の水源であることも大きな理由であった。

徐々に進む地域の過疎化と農林地の荒廃を目前にして、早く手を打つ必要があった。まずは、水や緑の受益者である都市住民に、現在の農林地の状況を体感してもらいたい。次に、この地の林業を「理解」する消費者を増やし、新しい市場を開拓したい。そして、若手後継者を中心に、農村で生活を営み、国土を守る担い手を育てていき



建設中の「四季菜館」での食事

たい。榎原氏と宮園氏等のこういつた想いから、一九九四年に、環境保全グループ「山村塾」を設立した（三）。中心メンバーはこの二名に加え、以前から薬物汚染問題に取り組み続けてきた毛利宗孝氏の三名である。

「山村塾」の取り組み

「山村塾」のプログラムには、「稲作」、「山林」、「古里」の三コースが用意され、月に一回（日曜日）活動が行われている。棚田では、田植えから稲刈りまでの農作業、森林では植林や下草刈り、そして炭焼きを行っている。都会の人々は、様々な癒しを求めて訪れており、この活動は、週末を楽しむ会員制のグリーンツーリズムといえよう。

さらに、一九九七年に榎原氏は、体験宿泊施設「四季菜館」を建設した。この施設には、三人以上が宿泊でき、車椅子用のスロープやトイレ、薪ボイラーや太陽光発電が備えつけられており、環境に配慮した施設となっている。榎原夫妻の自然環境と農業に対する思いは、宿泊や農作業の体験により訪問者に伝わってくる。これらの取り組みの中で、都市住民と山村塾の交流は深まってきたが、将来の展開を考えると課題も生じてきた。

一つは、訪れる都市住民が「訪問者」という立場に留まる点である。交流活動は、理解ある消費者を増やしている。しかし、先に述べたように、若手後継者を中心に、地域の担い手を育てなければならぬ。

二つ目は、景観保全整備のための人手と経費の不足。地域では、以前から棚田の石積みや、畔や石垣、そして林地の草刈りを共同作業で行ってきた。しかし、労働力の不足する中、これからの農業環境の維持は難しい状況にある。

三つ目は、地域の「理解」を得る難しさである。

周辺の農林地については、今後、さらに荒廃の進むことが予想される。地域内外の「理解」を求め、農林地の保全を進めなければならない。

都市住民を招くだけでは、地域環境の保全は難しく、何か新しい試みを模索していた。そんな中、重松教授より「里山保全ワーキングホリデー」開催の提案があった。

里山保全ワーキングホリデーの始動

一九九七年から二〇〇一年にかけて、この企画は「国際里山・田園保全ワーキングホリデー」福岡（以下、里山ワークという）と称して、毎年行われている。実行委員会は、農林家や山村塾の会員、そして大学生などである。行政や民間団体に資金の提供を仰ぎ、ボランティアを公募することで実施している（四）。これまでの活動状況について紹介したい。

一回目の保全活動は、管理の遅れているスギ林

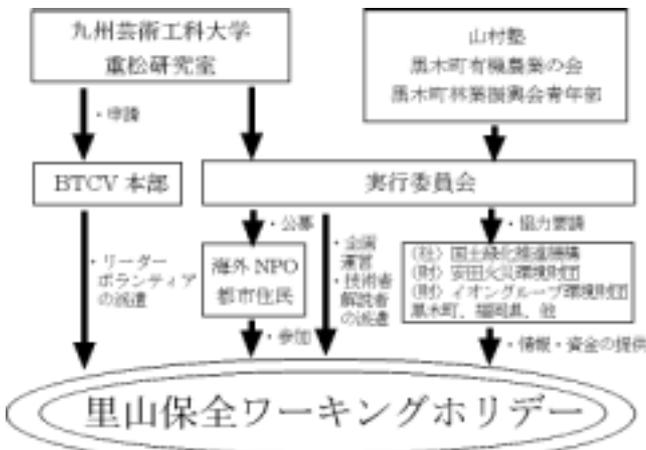


図 - 1 組織構成

の間伐、放棄農地に侵入した竹林の除伐、そして崩壊した棚田の石垣修復を対象とした。約一日間のプログラムは次のようなものである。初日、オリエンテーションと開会パーティー。二日目以降、昼間は作業、夜は地元との交流や、豆腐、わらじ作り。休息日には、小さな観光ツアーや、海外ボランティアのホームステイ。そして、最終日には、地元のお祭りに参加、記念撮影とお別れパーティーなどである。

初年度は、試行錯誤の中で、実施にこぎつめたという点で大きな意義があった。しかし、重要な反省点として、イベント色を濃く打ち出したことが指摘された。精緻な企画は、ボランティアを客という立場にすり替え、スタッフに過重の労働を強いた。いわゆる、一過性のイベント疲れを来たしたのである。環境保全のボランティア活動は、相互に目的を見つめ、対等に交流を続けなければならぬ。農村が主体で活動を行う場合、受け身の立場にならないよう気をつける必要がある。

ハートフルな活動運営

英国におけるBTCVの成功には、ボランティアリーダーの養成と良質な活動の展開という戦略がある。日本の農林地において、継続的に環境保全活動を遂行するには、農民と都市住民の関係を取り持つ、リーダーの役割が重要だと考えられる。そこで、2回目以降の活動では、複数にわたるリーダー業務を役割分担することにした。作業技術は、技術者（地元の農家や林研）が担当し、作業解説は、解説者（大学関係者）が行つのである。ここで、作業現場の雰囲気をお伝えしよう（図2）。朝九時、一つの班は、複数のリーダーに、七〜四名で構成される。作業現場に到着すると、準備運動をして、作業の目的、方法、分担を確認



図-2 里山ワークの一日

する。特にBTCVリーダーは、安全な道具の使用方法について、身振りを加えながら懇切に解説する。当初、技術者は棒立ちのボランティアを横目に、普段の仕事のように作業を進めることが多かった。けれども、解説者は適宜作業を止めて説明に努めた。英語、方言、共通語と言葉には苦労するが、徐々にボランティアと技術者は、協調して作業を進められるようになる。石積みや森林管理の技術に触れ、自分で体験を重ねると、往々にして感嘆の声があがる。そして、一時間程度で途中休憩を入れ、ゆっくりとお茶を楽しむ。作業と休憩の調和は、無理をしないこの保全活動の要であり、最も重要な気配りの一つである。

さて、里山ワークには作業以外にも活動がある。毎日の賄は、ボランティアを中心とした班により行われる。清掃や炊事、有機野菜の収穫などで、地元の料理を体験することは、地域の食文化に触れると評判がよい。夜になると、解説者はさらに忙くなる。反省会議、スケジュールの模造紙板書、海外活動紹介の通訳、そしてニュースレターの発行である。フルタイムの活動は、九州芸大の学生のなせる技であるが、彼らの成長は目覚ましい。これらの活動運営を行う里山ワークでは、言語の壁を超えて、連帯感が急速に深まっていく。農業を基本とした地域固有の技術を持つ農林家と効果的な説明に頭をひねる解説者の協力は、ボラ

ンティアと目的を共有し、真の交流関係を築くことを可能にした。

都市と農村の新しい接点「里山」

これまでの活動内容を表1に示す。回を重ねる毎に、新しい活動を取り入れ、棚田の修復と山林の管理に加え、施設整備も行つようになってきた。また、ここ数年の小学校との交流は、地域の保全活動に対する「理解」を確実に広げている。これは、地域を越えたパートナーシップの成果であり、魅力的なボランティア活動を展開しているといえるだろう。

年)	1997	1998	1999	2000
山林の管理	○	○	○	○
散策路・階段工			○	○
竹林の除伐		○		○
棚田の修復	○	○	○	○
東屋の建築				○
町民との集い	○	○	○	○
小学生との作業			○	○
運動会への参加	○	○		○
祭りへの参加	○			
参加国数(国)	2	3	2	7
ボランティア数(人)	26	33	24	32
活動日数(日)	10	10	8	10

表-1 里山ワークの活動内容

これらの活動を可能にしたのは、椿原氏の「四季菜館」という民泊施設の利用と、助成金による活動費に負うところが大きい。今後の課題として、ボランティアの活用できる施設や設備を充実させ、農林家の負担と活動経費を下げる必要がある。また、椿原農園の専従スタッフとなった小森耕太氏は、毎月、地元後継者と共に、「ミニ里山ワーク」を始めた。彼等のように、地域で活躍できる若手リーダーの育成も望まれる。こういった面に、行政の支援が必要であろう。

「ワーキングホリデー」は、「活動」(Working)と「休暇」(Holiday)という相反した言葉を一つにした、絶妙な取り組みである。ボランティアは、多くの「作業」を完成させ、共に働けた喜びを分かち合う。それ以上に、美しい農山村を満喫し、充実した「休暇」を終えて帰途につく。農林家は、貴重な労働力を得ることにより、農林地を活用できる。また、新しい人との出会いも魅力的である。この里山ワークは、都市と農村相互の求める接点に成り立つのである。その役割は、主に三つ上げられる。

一つは、地域や世代を超えた活動の提供。二つ

目は、地域の担えなくなりつつある景観保全の支援。三つ目は、農林家と都市住民の「相互理解」の拡大である。

おわりに

来年度の里山ワークは、「リーダー養成」を新たな目標に据える。まずは、この地域の保全活動を支える人材が必要だからである。この活動を各地域に広げるには、将来的に公益性を確保したNPOを組織し、行政・企業・都市住民の協力を得なければならぬ。特に、教育や地域環境の保全を進めるために、市町村を中心とした行政の積極的な取り組みが必要である。「里山保全ワーキングホリデー」への投資は、農山村住民とボランティアの共同作業を通して、多面的な利益が還元される(図3)。その利益とは、自然、人材、そして経済に及び、安定した都市と農村を支える循環として機能するのである。こういった、パートナーシップに基づく実践が、各地域で行われることを期待している。

(一) British Trust for Conservation Volunteers



間伐したヒノキ材を、馬により搬出



東屋の支柱となる材の皮剥ぎ



竹の側で休憩するBTCVリーダー



作業の分担により、完成しつつある東屋



図 - 3 都市と農村を支える循環

http://www.btcv.org
 (二) 重松敏則 新しい里山再生法(社) 全国林業改良普及協会
 (三) <http://www2.kanri.or.jp/~nmi1065-7/>